

仕事をしてお金を得て、仕事に役立つなにかが欲しいという男がいました。彼は町に行きロバを買いました。よいロバでそのロバに乗って彼は畑に行きました。途中である人がその男に会い「こんにちは。」と挨拶をしました。すると男は「いいや。私のロバは売れない。」と言いました。その人は挨拶をしただけでしたが、男は「私はいくら積まれても今日は私のロバは売らない。しつこく言っているようだが。」彼が何かを言う度に男は「私はロバを売らない。あんたはいいロバを持っているじゃないか。私は仕事のために買ったのだ。」と言い張ります。そして家に着きました。家に着くと妻がドアを開けるなり男は妻に言いました。「妻よ、道で会った人たちは私にしつこくいくらでこのロバを売るかと聞いてくるんだ。私はロバを売らないと言った。」妻は男に言いました。「あなた、食事をしてください。今日は食事を作ったのは私ではありません。子どもが作りました。この男は何もいませんでした。中に入り座って食事をしていると妻がしつこくいいました。「私は食事をつくっていません。もし塩が多いとか塩が足りないとかよく炊けていないとかがあったら、作ったのは娘ですから。」「私はロバの話をしているのに彼女は食事の話をしている。」すると子どもが呼ばれました。母親が子どもを呼びました。「娘よ、こっちに来なさい。ほら、お父さんが今日のこの食事はよく炊けていないし、塩が多すぎると言っているよ。あんたが料理したんであって、今日私は料理していないからね。」娘は言いました。「どうでもいいです。あなた達が結婚相手と決めた人ならどんな人でも結婚します。良い人だろうが悪い人だろうがあなた達が結婚させたいと望まれるとおりにします。私に聞かないでください。」彼女の母親は驚きました。娘は走って祖母の部屋の中に行きました。そして彼女は祖母に言いました。「お父さんが夫となる人を連れてきました。彼は私を嫁がせたいのです。そして私に聞いてくるのです。私に夫について聞いてくるのです。彼は私を嫁がせるだけでしょう。お父さん自身が彼を望んでいるのです。祖母は彼女に言いました。「いいかい。私はねあなた達が食事を作って私に与えてくれたらそれを食べる。彼女は私にくれなかった。だから私は寝るんだよ。」このようにそれぞれの人が自分の言いたいことを言い他の言う人が言うことは聞いていないのです。それぞれが自分の言いたいことに戻るだけです。これはそれぞれの人が自分の心に思っていることをそれぞれに言う場合には理解し合えないということを私たちに教えてくれる話です。妻は夫が帰ってきて食事がまずいと思わないようにと思っていた。いいですか。だから彼女の言いたいことを繰り返しました。そして娘も父親は私を嫁がせただけだと思っていた。彼女の頭には結婚させられることしかなかったのです。そして祖母はというと彼女の頭には食事をもろうということしかなかった。仕事はない。食事を与えられればそれでよい、と。与えられれば良いし、与えられなくても仕方ない。ということでこの話は「反時計回り(?)」と呼ばれる話です。あなたはこういう、彼はこういう、というような。